多様な人たちと共に場をつくる挑戦

場づくりの信条

一方的に教わるのではなく、全員が何か持ち帰れる、互いに学び合う場にすること。
この場が何かを議論したり提言したりする場ではなく、自由な発言、自分と異なる意見を歓迎する安心・安全な対話の場であることを大切にしました。また、その場で生まれたものをまとめすぎないよう、統一見解への誘導にならないよう意識しました。例えば、対話前には下記のようなグランドルールを共有しました。

1. 自分を大切に	役割や立場は脇に置いて自分の感覚や本音で話す
2. 相手を大切に	正しい意見かどうかではなく、自分と異なる意見を知る機会と考える
3. 場を大切に	この場で見聞きした他の参加者のプライバシーは他言しない 自分とは違う意見を聞いた時の自分の心の動きや違和感の意味を感じよう

場づくりのプロセス　- 多様な主体とともに -

ヒアリング・目標設定
専門団体や当事者で場の価値について考える

▶

ワークショップ考案
（運営側）

▶

編集会議
（まちすき編集部）

▶

イベント開催

こんなことに悩み、考えました

Case1　国際理解交流会

普段は日本語のみで作成する申し込みフォームを英語と中国語で翻訳しました。その言語のユーザー以外を排除することにならないか懸念する意見もありましたが、実際 2 言語だけでも大変なことでした。申し込みフォームやアンケート、スライドの英訳で Sharing Caring Culture（以後 SCC）メンバー総出で夜中までやりとりをしたり、当日も参加者の中で英語が得意な人たちに通訳までお願いしたり、イベント初回にして既に自団体の力不足を感じつつ、これが今後の学びにつながっていくという手応えもありました。

Case 2　障がい理解交流会

スピーカーは視覚・聴覚障がいを持つ方に依頼しましたが、本来、障がいはとても多岐にわたるもの（身体障がいだけですらない）のに、障がい理解と謳ってよいのかという迷いもありました。結果的には同じ視覚障害でも白杖ユーザーと盲導犬ユーザーがいて、さらにひとりひとり背景も考えも異なることが共有されたことで、障がい者の共通項を知るのではなく、個への関心・理解につながったと感じています。

Case3　世代間理解交流会

最初の 2 回と比較すると深刻さが低めに感じられるこの回は「まちの中にある、目に見えないけれど実は高い壁がここにあるのではないか」という仮説をもとに企画しました。どの世代を対象にするかで若者とミドル世代、ということが決まってからもワークショップのテーマが決まらず、当日参加してくれそうな学生や協力団体に事前に集まっていただき「互いに何を聞きたいか、話したいか」をヒアリングしました。色々盛り込みすぎて対話の時間が足りなかったという反省もありますが、その点を改善したイベントをラボで再び計画中です。
この回では特に年長者がアドバイスする側にならないようグランドルールの共有時に配慮しました。

協力運営団体　　株式会社 NTT テクノクロス　NPO 法人コドモト